

# ガンディのジェンダー

## Gandhi on Gender

中 村 麗 衣

NAKAMURA, Rie

### はじめに

三十年も前のことになるが、初めてインドを訪れ、目の当たりにした女性の風俗に、奇異の感を抱いた。眉間には赤い印、黒髪中央の分け目は、血が流れたように赤くにじんんでいる。カルカッタのカーリーガート寺院には、午前中に女神に捧げられた山羊の血が生々しく残っていた。「インドの赤」との出会いであった。

一口に赤といっても、その色相は実に多様である。洗朱、浅緋、唐紅や真緋など、紺屋には繊細で情緒的な赤がある。インドの赤をどのように表現したらよいだろうか。フランスの口紅に「インディアン・レッド」というものを見つけた。これは目のさめるような深紅であった。また「ニューデリー」と名づけられたスイスのマニキュアもあった。これはやや黒ずみ、赤褐色に近い赤である。インドの赤は後者のイメージ、鉱石、血の赤である。インドでは古くから、女性と血とは深いつながりの中で考えられてきた。女性の額につけられる小さな赤い丸は、元来は血であったと考えられている。血の儀礼<sup>1</sup>に参加して得られたエネルギーの証として赤い印(ティラカ)が額につけられた。また、ヒンドゥ教の寺院

において供養祭などの終わったあとに、「神からの恵み(プラサーダ)」の印として額に塗られる赤い印もティラカと同じ機能をもつ。新婦のサリーの赤も、既婚女性の髪の分け目につける赤い粉(シンドゥール)<sup>2</sup>も、経血の赤、多産性の象徴であると思われる。少女が娘となり母となっていく過程は、出血の歴史である。母となる可能性、つまりほかの固体を産むことが可能である証は血であり、分娩もまた多量の出血を伴う。しかしバラモン教の聖典群『ヴェーダ』では、血は不気味なもの、恐ろしいものと忌み嫌われ、不浄なるものとされる。女性のもつ一連の「出血」の歴史は、男性にはないからであろう。

国民の8割以上がヒンドゥ教徒であるインドでは、宗教と慣習が一体となって、ときに教義よりも伝統にもとづいた慣習が重んじられることがある。古からのやりかたは、古ければ古いほど宗教の衣をまとい遵守される。ヒンドゥ教の『マヌ法典』では、女性は「嘘のように不浄」な存在とされ、生まれながらにして男性よりもはるかに低い地位にあるとされる。かつてはまだ理解力のない幼児のうちに嫁がされ、夫を神としてあがめ、服従するものとされた。女性は独立を享受してはならず、知識や教養を身につけるなど論外で

---

キーワード：ガンディ、カストゥルバー、ブラフマチャリア  
Key words : Gandhi, Kasturba, Brahmacharya

あった。パルダール規制のもと、初潮を迎えた女性が単独行動をするなど考えられなかった。

インドの民族運動はアジアでも非常に早い時期に始まったが、暴力をも辞さないというものであった。また運動の中核は、イギリスによる英語教育を受けた当時のヒンドゥエリート層たちであった。こうした運動形態を大きく変えたのがガンディ（Mohandas Karamchand Gandhi, 1869-1948）である。ガンディといえば、いかなる暴力にも暴力を用いず抵抗することで、時の大英帝国の支配者たちをも震え上がらせたことは有名である。また、ガンディはインド女性運動の親とも讃えられる。なぜなら、親族以外の男性と視線を合わせることもなかった女性たちが、この時期、政治に参加するようになったからである。ガンディは、西欧の近代文明をアジアの文明に比べて男性的で暴力的であると批判した。そして大衆に武器を放棄することを要求した。ガンディにとっての武器、暴力は「男性」性、やがては「女性」性にまで拡大されていった。インドのフェミニズム<sup>3</sup>の立場からは、ガンディが「反近代」「非暴力」を運動の中心においたこと、そして開発のオルターナティブとして、女性原理の回復を訴え、女性のもつ「母性」をほめていることが評価されている。「性」というものを異常なまでに嫌悪し、否定したガンディの立場については、さまざまな解釈がなされている。政治家としての計算なのか、彼のもつ本質的な部分に問題があるのかなど、その理由の多くの部分は謎につつまれている<sup>4</sup>。

ガンディは47歳の父と25歳の母の最年少で最後の息子である。母プターリバーイー（Putlibai）は、4番目の妻である。一女三男を生み、末子がガンディである。当然、家族

中において中心的な位置を占め、甘やかされがちであった<sup>5</sup>。つねに母は「朝一番早く起き、夜は最後に就寝し」、「食べられるときに」だけ食べる、「尼僧的性格」で理想的な家庭婦人として描かれる。後年はぐくまれる女性の理想像が、母によって示されたことは確かであろう。しかしガンディと結婚し、4人の男児を産み育て<sup>6</sup>、さらに夫の試みるさまざまな実験を支え、ブラフマチャリア<sup>7</sup>宣言を受け入れ、最後はガンディにペニシリン治療を拒否されてこの世をさった妻カストゥルバー（Kasturba Gandhi, 旧姓Makhanji, 1869-1944）はどうか。母に比べると妻の精神的位置づけはあまり明確ではない。自ら、過ぎ来し方が残せなかったカストゥルバーについては、ガンディの秘書でカストゥルバーの傍にいたスシーラ・ナイヤール<sup>8</sup>が著した伝記があるが、ガンディの妻への評価は低いといえる。ガンディと母の関係については、自叙伝や精神分析学者E.H.エリクソンの分析<sup>9</sup>に譲るが、妻はガンディにとってどのような存在であったのか。本稿は、超純ヒンドゥ教徒であるガンディのジェンダー観をさぐるため、まずインドの伝統的な女性像について概観する。そしてガンディと妻の関係から、ガンディのジェンダーを考察する。

## 1. インドの女神

インド文化圏におけるジェンダーの特徴を二点あげておこう。まず、一つは「女神像」の特徴である。「母神」あるいは「女神」といえば、一般に美しく優しい女性像を思い浮かべる。しかしインドの女神は、優しいイメージを持つものと恐ろしいイメージを持つものとのわかる。そして「優しさ」と「恐ろしさ」、あるいは「美しさ」と「醜さ」との落

差は大きい。また、同一の神が優しいイメージと恐ろしいイメージの二つを持ち、さらに異なる神、たとえば美女ドゥルガーと醜悪なチャムンダーとは同一の神だと考えられる。落差と同一視が同時に存在してしまうことから、女神たちのイメージは複雑なものとなった。ヒンドゥの母神は、マリアであり魔女でもあるという、独自の文化的伝統を持っている。母神は、誕生の奇跡や、性行為による生命の創造、豊饒のシンボルとしての月経、血の儀礼を行うことによってあがめられる。古代、バラモン男性にとって、子供の誕生や性行為や月経はけがれの源だったが、母神信仰という形で父権的宗教（バラモン教）の儀式の中に吸収されていく。バラモンの僧侶は、女神の持つ男神をもしのぐような力をおさねばならないと考えた。そしてインダス文明以来の大地母神たちは、一般に男神の妃という形で描かれる。ドゥルガーはシヴァと結婚し、ラクシュミーはヴィシュヌと結婚する。凶暴な女神カーリーは、夫シヴァが彼女の前に横たわったときだけ、彼女を制止できるという。女神の危険な力を慈悲に変えるのは結婚であるということに落ち着いた。男神の妃としての位置づけは、たとえ夫の勢力を上回る勢力を持つときも、彼女が夫に「帰属する」従属的存在を示す。しかしこの結婚話は矛盾を引き起こしてしまう。バラモンの神話は、いかに男性が女性の性をコントロールすることを通じて女性の破壊力を抑制するかが語られているが、反面、女性の破壊力のすごさを物語ってしまう。

母がどくろの杯で生き血を飲むという図は受け入れがたいが、ヒンドゥの女神は血のシンボリズムに満ちている。血を直接飲むことは忌まわしいことであり、カーリーなど特有

の行為である。

現代タミル人のこんな発言がある。

「みんな生まれる前の10ヶ月は母親の血を飲んでおり、生まれてからも今度は乳のかたちで再び母の血を飲むんだ。」<sup>10</sup> 血飲み子が乳飲み子になるというわけである。このような考え方はヴェーダ文献にもあり、そこでは胎内の子供が母親の血を飲むといわれている。『スシュルタ・サンヒター』という古典医学書<sup>11</sup>では、女性における血液と乳の関係が定式化されている。妊娠中の胎児が、母から肉と血液を得る一方で、母は力強さと色を失うと指摘する。つまり、胎児が母を食うわけである。タミル人の言及には悪魔的なニュアンスがあるが、哺乳類は産まれてから一定期間、乳汁を主たる栄養源として生育する。哺乳類の名前のゆえんである。その乳汁は何からできているのか。『ヴェーダ』や『スシュルタ・サンヒター』のいうとおり、血液である。乳房組織は血液の赤みをフィルターして乳にかえる。血液から生み出された乳を授乳することは聖なる行為とみなされ、母神パールヴァティの特徴とされる。

ヒンドゥ教では、「聖なるもの」と「俗なるもの」という2つの軸と、「浄なるもの」と「不浄なるもの」という軸が考えられる。ヴェーダの宗教では、血は不気味なもの、恐ろしいものと忌み嫌われて「不浄なるもの」だった。人間にとって好ましくないもの、不可欠のものという意味では「浄なるもの」、さらに「聖なるもの」になったのはヒンドゥ教における女神、あるいは母神崇拝の台頭と深く結びついている。つまり、バラモン教では「聖にして不浄なもの」であった血が、ドゥルガーやカーリーなどの女神崇拝にとってなくてはならないものだったため、ヒンドゥ教では「聖にし

て浄なもの」へと変化したのである。バラモン男性はマヌ法典での女性は穢れたものとする考え方を維持しながら、強い女神、豊饒の母神を認めたわけである。

次に、二つ目の特徴として、インド文化圏には第3の性ともいえるトランスジェンダーの文化が存在する。ヒンドゥ教の多くの神話、儀式、宗教的役割、テーマは、男性から女性へ姿をかえるトランスジェンダリズムをとまなう。ヒンドゥ教のタントラ宗派では、男女両性は男性原理と女性原理を併せ持った一つの完全な性とみなされ、ヒンドゥ文化の中で、男女両性具有という特別な性の文化を作っている。ヒンドゥ教の二大神のひとりであるシヴァ（男性原理）は、ときに妃のパールヴァティ（女性原理）と合体し、男女両性具有神に形をかえて現われることがある。そして、ヒンドゥの世界では、神々と同じく人間社会にもこの両性具有という特別な性をもたらし、聖なる存在と位置づけた。

たいていの文化のほとんどの人にとって、ジェンダーアイデンティティは、男性か女性のどちらかはっきりとした二分法であり、人がその人自身を男性もしくは女性として体験することが望まれている。しかし、インドの文化では制度化したもうひとつのジェンダーがあり、中間のジェンダー役割と、幅広いジェンダーアイデンティティのあり方を認めている。ヒジュラ (hijras) とよばれ、男でも女でもない存在、つまり性を超えるトランスジェンダーとして、宗教団体、ヴァルナとして、社会に定義され、多かれ少なかれ容認されてきた長い歴史と、性器手術の長い伝統をもつ。インドの人口調査がヒジュラを分けて数えていないために、正確な人口はわからないが、非公式な数字ではインド全体で4万人

といわれる。2006年11月21日、タミルナドゥ政府は第3の性の人への外科手術を公式に認めた。さらに2008年3月、同州で初めて第3のジェンダーが公的な市民権を得た<sup>12</sup>。

ヒジュラの場合、全員が生まれつきの人たちではない。ヒジュラの伝統には、生まれ持った男性という性を放棄するための象徴的行為として去勢の外科的な技法があるが、男性を去勢すること自体が女性としての生活を必要とするわけではない。また伝統的な仕事<sup>13</sup>を行う場合には、必ず女装しなければならないが、このようなことは、西欧での女性擬化とは異なる。

ヒジュラは去勢手術をニルヴァンとよぶ。ニルヴァンは欲望がない穏やかな状態のことで、制限ある人間的な意識からの解放と高次の意識が始まる兆しとされる。ヒンドゥ教の聖典ではこの体験が始まると第二の誕生、または知恵の目が開眼するとされる。ヒジュラたちもニルヴァンを再生と解釈している。ニルヴァンによって、以前の普通の男性の体が一度死に、神聖な力（シャクティ）が新しい体に与えられて生まれ変わるといふ。不能男性を、潜在的力を持った人間に変容させる儀式である。通過儀礼である去勢手術は、ヒジュラ文化のイニシエーションの一部として行われる。ヒンドゥ教の教えでは、セックスの放棄と性的欲望の抑制は苦行で得られる力に関連づけられており、それがヒジュラの力の核心だと思われる。ヒジュラたちはこのことをはっきり認め、自分自身のことを、社会生活を放棄した聖者や乞食、あの世の者という。物の所有の放棄、カーストなど社会的関係、家族の一員としての人生や、普通の男性や女性をもつ世俗的な執着も、そして特に性的欲望（カーマ）の放棄がもとめられる。宗

教的苦行での禁欲の重要さは、性的欲望が精神的な目的を乱すと考えられていることによる。また、性行為は精液の損失を伴い、精神力が低下すると思われている。ヒジュラが去勢するのは、性的欲望も性的感覚もない「証明」なのである。

## 2. ブラフマチャリア

ガンディは1909年、南アフリカからインドへの帰途の船上で、自らがインドで率いていく民族運動の指南書ともなる『ヒンドゥ・スワラージ（インドの自治）』を、1週間たらずで書いた。インドの自治とは、インド人各自が自己を治めることであり、自己を治めることは自己を制御することであるというのである。19世紀初頭、近代化が進む世界の中で、ガンディは徹底的に物と欲を排除し、妻子との関係も放棄していく。

当時のインドで、幼児婚が一般的であった例にもれず、ガンディは13歳で結婚した<sup>14</sup>。このころからガンディにとって性欲は、精神的集中力を枯渇させるものであるにもかかわらず、自在に制御できないものであった。伝統的に、精液を失うことは、高度の活力の消耗を意味すると考えられていた。高度の頭脳力は射精によって失われるが、逆に節制によって蓄えられ、頭脳にすいあげることができるという考え方が、ガンディに葛藤を生じさせる。16歳のとき、看病の目をはなし妊娠中の妻と同衾した間に父がなくなり、そのときの赤ん坊は生後2、3日で亡くなる。1888年9月4日、18歳のとき、「長期にわたる健康的な別居期間」イギリスに留学する。すでに、ガンディは結婚してから5、6年たっており、しかもひとりの子を持つ父親でありながら、自分を独身と偽ってはばからなかったという。

自分が幼児婚をして、妻帯者であることが恥ずかしく思ったということと、イギリス女性と談笑したり、外出したりする機会がなくなることとを恐れたからという理由である。

妻のカストゥルバーは1888年長男Halilal、1892年次男Maniral、1897年三男Ramdasを出産し、ガンディは自ら産婆役を務め育児をおこなってきた。しかし出産や育児が自分の社会活動の妨げになると感じ、1899年、ガンディはこれ以上子供を望まないことを決める。ガンディは避妊薬（用具）を使用することに反対していたので、禁欲的生活をすることになる。ガンディは、自分たち夫婦の間において、妻の方から挑発されたことはかつて一度もなかったと告白する。それならば自分から性交を慎むことは簡単ではないかと考えた。生活環境を変え、食事を変えた。しかし、自分の考えた改革が失敗すると、「私の肉欲が邪魔をした」といい、このように「自分を逆上」させる原因は妻にあるとあってあたりちらす。結局、自制による避妊には困難が伴い、1906年に正式な誓いをたてる。これがブラフマチャリア宣言である。ブラフマはウパニシャッド思想の宇宙の本質ブラフマン（梵、中性）を神格化したヒンドゥ教の主神の一つで、ブラフマチャリアはブラフマンへの道を意味する。ガンディはブラフマチャリアを、性的禁欲、性交放棄の意味で用いる。

自伝でもはっきり記しているように、実はブラフマチャリアの動機はもともと宗教的なものでもなく、避妊が目的であった<sup>15</sup>。ガンディの主な目的は「それ以上子供をつくらないこと」、「受胎時の両親の肉体的、精神的状態が幼児に再現される」、したがって、夫婦は「子供をのぞむ」ときのみ交わるべきであるというものであった<sup>16</sup>。ガンディは、主

人に対して忠誠を誓う僕の奉仕は、妻が夫に捧げる貞節にくらべると千倍の価値があると感じられるという。なぜなら、夫婦の間には一体感というものがある。したがって、夫婦相互間に愛情があっても別に驚くにはあたらない。だが主人と僕の愛情は努力なくしては決して育たない、というのだ。ガンディは、妻が肉体的に夫と関係しないときにだけ夫の喜びや悲しみの協力者であり、同士であり、仲間であることができるという仮説をたてているように思える。ブラフマチャリア宣言当日までカストゥルバーには何の相談もなく、いきなり同意を求めるが、当然、妻には何の異存もなかった。なぜなら、ブラフマチャリア宣言の2年前、ガンディはズールー族の反乱の野戦衛生隊を結成して従軍するため、ダーバンの家をたたみ、カストゥルバーと子供たちはフェニックス農園<sup>17</sup>に送られた。この時点で、一般的に考えられるような家庭は崩壊し、カストゥルバーは夫婦の関係を放棄することを受け入れていたわけである。カストゥルバーにとっては、ガンディがブラフマチャリアに成功しようとしまいと、妻は夫の喜びや悲しみの協力者であり、同士であり、仲間であると信じていた。

ブラフマチャリアを守るためにおこなったこととして食事の規制と断食がある。これも妻の病気を治すためという口実だった。ガンディは、ブラフマチャリアはまず味覚の欲望を克服しなければならないという。ガンディが尊敬し、師と仰ぐグジャラートの宝石商で詩人、哲学者のライチャンドバーイ(Raychandbhai)の「牛乳は官能の欲望を刺激する」という話が決定的となり、6年間、塩、香辛料、豆、乳製品などを絶つなど、さまざまな食実験を繰り返す。ついに彼は断食がブ

ラフマチャリアに最も有効であると気づいた。ガンディが危機に臨むと繰り返す断食も、はじめはブラフマチャリアのため行われたものであった。

人間の内面変革をめざすガンディの理念は、サティヤーグラハに集約されていく。サティヤは真理、アグラハは把握という意味だが、ガンディは暴力という非真実（真実でないこと）に暴力で対抗することなく、いかなる弾圧にも非暴力（アヒンサー）で対抗するという指導原理として用いた。サティヤーグラハは1918年から本格的に展開されるが、この基礎になる考えが、ブラフマチャリアである。避妊のためのブラフマチャリアがガンディの「私人」として狭義のブラフマチャリアとすれば、19年後にガンディが説明するような倫理的なブラフマチャリアは、「公人」として広義のブラフマチャリアといえる。サティヤーグラハとよばれる運動に参加できる者の資格として、自己を制御できるもの、つまり禁欲の誓いをたてた人のみが認められた<sup>18</sup>。ガンディのスワラージ（自己制御）は性という「武器」を放棄することによってのみ、暴力を克服することができるかと語っている。やがて性欲をコントロールすることは、全ての欲望をコントロールすることに拡大されていく。広義のブラフマチャリアには、性的に自己を武装解除する、心理的に自己去勢する意味があったといえる。これは実はヒジュラの通過儀礼ニルヴァンにあたる。

ガンディがスワラージの象徴としたのは、チャルカー（手紡ぎ車）である。19世紀以来、イギリスからの機械製綿布の流入によってインドの綿業が大打撃をうけ、手紡糸生産が衰退した。このころインドのどこにも、チャルカーも、織り機もみかけられなかった。1908

年、ガンディは「インドの貧困を解消するにはチャルカーの振興開発しかない」と説く。1915年に、ガンディが南アフリカから帰国した当時でも、まだチャルカーはインドになかった。アーシュラムを開設し、その住人は、国産の糸によるカーディー（手紡ぎ手織り布）の服を着ることにきめた。そのため、まず織り機を買い、糸の紡げる女性を捜し、梳綿職人を捜した。自給自足を可能にするチャルカーこそが最適な道具であり、スワデーシーのシンボルとしてカーディー作りをとりあげたわけだが、これはインド人にとっては伝統的に女性の仕事であった。女の仕事を男がすることへの抵抗や批判に対して、ガンディは、「そうです、私は半分女性になりたいのです。」と答える。この返答は、売り言葉に買い言葉だったかもしれないが、ガンディにとってのチャルカーは政治的な象徴であると同時に、ジェンダー的な象徴でもあった。

ガンディはブラフマチャリア宣言のころから、第3のジェンダーになることを求めている。側近のピアレールは、ガンディと話しているとき、しばしばガンディが男性であることを忘れたという<sup>19</sup>。ガンディは中性的であることを誇りに思い、しかも子供を産むために生まれた女性よりも母親のようになることを望んでいたという。

### 3. カストゥルバー

ガンディのアーシュラムには、彼と寝起きをともしながら活動に携わる女性が、インド各地から集まってきたが、ガンディは女性の行動をコントロールしたいと考えていた。一方では名も無い何億ものインドの大衆に無限の期待と愛をよせながら、一方では独裁者

のように運動を自分の掌中に収めようとする。そのため女性が一線を踏みはずすと怒りをあらわにした。ところが唯一、最後までガンディをてこずらせた女性がいた。妻カストゥルバーである。カストゥルバーについて、日本ではあまり知られておらず、ガンディの傍らにいた詩人のサロージニー・ナイドゥや姪が、妻と誤解されたりするほどである。

筆者はガンディの妻に対して、ガンディの影に隠れた存在感の薄い女性、インド社会で差別に打ちひしがれた女性という、暗く悲しいイメージを抱いてきた。ところがカストゥルバーの生き様について知れば知るほど、実は彼女がいたからこそガンディがマハトマになれたのではないかと思うようになった。ピアレールの母は、ガンディの運動に加わりアーシュラムに行ってしまった息子連れ戻すためにガンディの元を訪ねる。ガンディの「世俗的な執着を捨てなさい」という言葉に、ピアレールの母は黙ってしまう。しかしカストゥルバーは母の立場から、ガンディに反論するのである。この世の理不尽は承知の上で、変化に順応していかなねばならない、誰もが重荷を分かち合わねばならないのだと。ピアレールの母は、ひと目で彼女の魅力のとりこになる。当時50歳を過ぎていたカストゥルバーは母としての深い愛情に満ち、肉体的にも精神的にも人並みはずれた忍耐力を備えた女性であった。カストゥルバーはガンディとは違い人間味あふれた女性で、まさにシーターやサヴィトリのように映ったという。カストゥルバーの存在があったからこそ、アーシュラムに多くの非暴力の戦士が集まってきたのだろう。

カストゥルバーは、日本では明治天皇が即位した約半年後の1869年4月11日に、西イン

下のグジャラート州ポールバンドルの裕福なビジネスマンの家に生まれた。ガンディは、その近所に住んでいた同い年で強情張りのカストゥルバーと遊んでいた。13歳という「子供夫婦」ではありながら、結婚後まもなくガンディは夫権を行使し、妻のすべてを把握しようと干渉する。自分以外の子の遊び相手になってはならない、出かけるときは許可を得ることなど、圧迫を加えれば加えるほど、カストゥルバーはますます自由気ままに振る舞い、彼女もガンディに干渉してくる。幼妻はどこへ行こうがいちいち文句をいわれる筋合いはなく、囚人状態に忍従し、承服するいわれもなく、一言も告げずにどこへでも平気で出かける。ガンディは自分が身体能力も知能も低く、臆病だったのに比べ、カストゥルバーは素直で勤勉で自主性が強く、ずっと勇気があり、蛇も暗闇もおそれず一人で平気で歩けたと記している。ガンディは、カストゥルバーの素直さと威厳は侵すべからざるもので、幼いころから自分より勇気があり、はじめて出会った師であったと認めている。だからといってガンディが恐妻家だったかという、そうではない。カストゥルバーは教育こそうけていなかったが、素直で勤勉で自主性が強く、賢明な女性であり、ガンディ同様、非常に敬虔なヒンドゥ教徒だった。そして「ヒンドゥの妻」としての義務を最優先していた。当時の一般的なヒンドゥ夫人とはどのようなものだったのか。ガンディがカストゥルバーに求めた理想の女性像とはどのようなものだったのか。古代インドでは女神（女性）は非常に強い存在であったが、男神（男性）によって力を封じ込められていく。『マヌ法典』に至っては女性は嘘のように穢れた存在にまで貶められた。そして女性は子供の頃から自

己犠牲と献身こそ美徳であると教え込まれ、夫を神とあがめる。大家族の中で息詰まるような、狭く暗い部屋部屋に共同の生活を営み、嫁姑、小姑、さまざまな視線の監視下で、厳しく行動を規制されて暮らしていく。カストゥルバーも義母の指導の下、敬虔なヒンドゥの妻になるべく教育されていた。幼い夫は妻の苦しみなど知る由もなく、カストゥルバーは泣きながら眠り、何度も実家に帰ることを考えたという。

カストゥルバーがガンディと行動をともにするようになるのは、1897年に長期滞在を決意して南アフリカへ渡ったときからである。ダーバンの法廷弁護士としてのガンディの住まいは、ヨーロッパ人たちの集住する地域にある家具調度の整った家であった。おそらくカストゥルバーにとって、腕を動かせば突き当たる狭さと息苦しさ、大家族という伝統の中で義母をはじめとする多くの女性の視線に囲まれ、忠告、非難を受けながら暮らす針のむしろのような日々から解放され、異国の地で夫と子供に囲まれた水入らずの暮らしを、一瞬にしる夢見たことであろう。しかし、ガンディはダーバンの自宅を、彼の思想に共鳴するヨーロッパ人を含めたすべての人たちに開放してしまう。ガンディはここで人種、信仰を問わずあらゆる人を「家族」として受け入れようと考えた。カストゥルバーにとっては、全世界に自宅を開放することは容易なことではなかったであろう。例えば、ガンディは人間の汚物処理は不可触民に任せておけばよい、という古くからのインドの慣習を打破しようとしていた。各部屋には簡易便器が備えつけてあり、自分のものは自分で始末し、客もそれを理解してそうしたが、不慣れな人のものはガンディとカストゥルバーが始末を

した。さらにガンディはその仕事を嬉しそうにするようにカストゥルバーに要求した。さすがにカストゥルバーが「このしきたりはあなただけになさいます。私にはこれしかできません。」と叫んだとき、逆上したガンディはカストゥルバーの手をつかみ、ドアのところまでひきずっていった。彼女は絶望と義憤で泣き崩れたという。

あるときカストゥルバーはガンディに、「家を出てどこへ行けというのですか。逃げて帰れる郷ありません。私はあなたの妻なので、どんな折檻にも耐えるしかありません。」という。ましてそこはインドではなく、南アフリカの地であった。ヒンドウの妻には夫を離れては生きられない現実があった。ヒンドウの妻は、夫への全面依存こそが貞節のあかしと心得、一方夫の方は、全権者は自分だけだと思いつけているので、妻は常に夫の操るままに踊らねばならない。

主婦として一日で最も時間を費やす作業は食事の仕度である。いつもカストゥルバーは大勢の「家族」のための炊事であってこ舞いであった。ガンディは1890年代末頃からさまざまな食に関する実験を行い始める。市販のパンに変わり、無酵母菌の自家製パンを作るようになった。製粉工場でひいた粉より人の手でひいた粉のほうが質素で健康的で経済的であるという持論から、石臼でひいた粉を使った。ガンディの食実験は、次第に宗教的な意味付けがほどこされ、食材が減っていく。肉を食べないのは当然であるが、穀物が絶たれ、乳製品、マサラが絶たれる。時にはカストゥルバーの命にかかわるような実験もあった。ダーバンで健康を損ねたカストゥルバーは麻酔薬なしの手術をし<sup>20</sup>、衰弱しきった妻をフェニックス農園に連れ戻す。そして薬を

使用せず、体の抵抗力を増幅させて治す自然療法を行う。一日に数回、腰から下を湯につける水療法である。当然、水の療法では効き目がなく、出血はどうしても止まらなくなる。そしてあらたに塩とダール（豆のスープ）を断つよう言うが、これにはさすがのカストゥルバーもなかなか同意しなかった。ガンディが新しい行動をする際、彼女はガンディの考えをいつでもすぐに受け入れたわけではなかった。食事に関しても、カーディーを着ることも最初は承諾しなかった。しかしカストゥルバーが拘束することはなかったし、最終的には合意し、協力する。彼らの間には争いが絶えなかった。二人がよく喧嘩したことはガンディも認めている。結局、カストゥルバーが持ち前の驚嘆すべき辛抱強さで事を収める。

カストゥルバーが政治的な活動に加わるようになったのは、1904年、フェニックスアーシュラムに移った頃からと考えられる。この頃から女性はアーシュラムごとに「フェニックス修道女」「トルストイ修道女」として政治活動を始めた。カストゥルバーは、1913年には南アのインド人労働者の労働条件に対する抗議活動をし、3ヶ月の禁固刑に処されている。女性が投獄されたニュースは、国際的ニュースとなった。彼女は日常生活では献身的な妻としてガンディを支え、政治的にはガンディの不屈の闘いに従事するサティヤーグラハの戦士でもあった。カストゥルバーのガンディに対する忠誠心は絶対的なものだった。彼女は政治的なことはわからなかったというが、ガンディの妻であること、そして夫を一番よく知っているという事実から、献身的に闘いに身を投じたという。ガンディが逮捕されるとしばしばガンディの代役を果たす<sup>21</sup>。

にもかかわらず、ガンディはカストゥルバーに対して不満をもらす。「私のすることの多くは今日に至るも、妻の賛同を得ている（彼女の気に入る）ようには思われない。私のすることについて、われわれ二人は決して話し合わなかった。話し合って、よい結果が得られるとは思えなかった。なぜなら妻は両親からも、また、私がそうしなければならない時期に私からも、教育されなかったからである。」カストゥルバーは、ガンディの行為そのものが面白くないと思っているようだが、こうしたことを一度も話し合ったことがないし、話し合うことに興味ももっていないように感じるという。カストゥルバーが何をガンディと話しあうことができ、何ができないかをガンディが一方的に決め、それをカストゥルバーの無学のせいにする。ガンディの陳述は、カストゥルバーがガンディの知的伴侶になろうと努めなかったことへの復讐心に満ちている。特にガンディは結婚当初から、妻に是が非でも読み書きを習得させようとした。これは当時の女性のおかれた地位からみると、かなり急進的である。ガンディは、妻を「教養を身につけた立派な女性」にしたい、つまり自分と同じことを習い、同じものを読む有識女性に育て上げたいと願った。しかし、カストゥルバーは皆に慕われる「おかあさん」になりたいとは思ったが、読み書きのできるものになろうとは全く思わなかったという。南ア時代、ガンディは英国仕込みの弁護士の妻という役割をカストゥルバーに課すことによって、再び彼女の読み書きに対する抵抗を粉碎しようと試みた。しかし彼女は恐れもなく非暴力的抵抗を続けた。ついにガンディは、カストゥルバーを思い通りにすることを断念する<sup>22</sup>。

元来ヒンドゥの女神たちは、優しく、美しく、かつ恐ろしく、男神をもしのぐ力を持っている。しかしその力を抑制し、慈悲に変えることができるのは、夫の力であった。夫の力によっても超えることのできない妻の前にガンディは屈する。

### おわりに

ガンディのもとでカーディー運動の書記長を務めたシャンカルラールが、年取ったカストゥルバーに、「きれいなものを着たいという望みはどうになりましたか」と聞いたとき、「人生において最も重要なことは、行くべき道の一つ選んで、あとは忘れることです。」と答えたという。カストゥルバーは幼い頃の結婚生活に関して何も語らないし、ガンディの言葉から察して、夫とさえも語り合わなかった。話し合いをしなかったのは、ガンディがこぼしているようにカストゥルバーに教育がなかったせいではないだろう。

ガンディが、夫としての役割、父親としての役割を放棄し、さらに「母のようにになりたい」、「中性になりたい」という背景には、女性生来の優越性をつきつけた母や妻の存在があった。ガンディにとって母プターリバーイーは神聖かつ不可侵の女性であった。なんびとも抵触してはならないその母の姿から、ガンディは女性の自己犠牲と貞節、母性を讃えた。理想とする女性は、母のような「尼僧的な家庭婦人」で、貞淑で献身的な妻シーターであった。それでは子供を生み育て、民族運動を闘った妻カストゥルバーは、「母」以上の女性ではないのか。ガンディは、妻カストゥルバーに「母」を要求することはなかった。ガンディは妻に知性を要求する。知的伴侶といえは聞こえはよいが、実験台である。

インドには伝統的に、男女両性具有（神）は、一つの完全な性であるという考え方があった。ガンディは、性を超えるトランスジェンダーこそが完全な性であり、機械化が進んだ将来、好戦的な男性性の価値は低下し、両性的な原理が必要になってくると考えている。たしかに現代の生物学は、生命の基本仕様は女性であるという事実を確認した。ガンディのジェンダーはヒンドゥ復古的であるが、時代的には非常に革新的だったといえる。しかしガンディのブラフマチャリアは「男性」性の否定であったという点で、トランスジェンダーとはいえない。「両性」になることは、「男性」を捨てるのではなく、「女性」を加えることである。さらにガンディのブラフマチャリアの矛盾点は、「悪い欲望」と「よい欲望」を区別し、「母のようになりたい」欲望や、「両性になりたい」欲望はよい欲望で否定されないのである。こうした矛盾は、本能的にカストゥルバーには見抜かれており、話し相手にもなってもらえなかったに違いない。妻の立場からみると、夫、子供の父親としてのガンディは、一般にいわれるような聖者のイメージからほど遠い。家庭を放棄したガンディは、妻や子供にとっては自分勝手な、愛のないひどい人である。このような夫に、カストゥルバーは天才的に、単純明快な真理をぐさりと突きつけることで、子供のように扱うことができたという。カストゥルバーにとって、ガンディのブラフマチャリアも、そのための食実験も、生活の改善も、中性願望も、話し合う必要性などない、忘れ去ったほうがよい問題だったに違いない。

## 注

- 1 元来、ヒンドゥの母神たちは、「すさまじく戦い、血に酔っている」女たちであり、血の儀礼と密接に関係していた。犠牲にされた生き物の血、しばしば人間の血を要求する女神や母神が数多く登場する。ベンガル地方に特に多くみられるカーリー女神の姿は、切り取られた生首を持ち、その生首から流れ落ちる血を受ける頭蓋骨の杯をもう一つの手で持っている。首には切り取られた人頭をつないでつくった環がかけられ、腰には切り取られた手が並べられてスカートになっている。唇には血がつき、長く赤い舌をだしている。カーリー女神はドゥルガーが敵の鬼神ラクタビージャと戦っているとき、ドゥルガーの顔面から生まれた。鬼神が傷つき血を流し始めると、その血からつぎつぎ鬼神たちが現れる。カーリーは血から生まれた鬼神たちを飲み込み、さらに鬼神の傷口から血を飲み、最後の血を吸い取って殺してしまう。カーリーは、残忍な破壊者、不吉の権化、激しい怒りを表し、犠牲の血を要求する神であるとともに、人々に恵みを垂れる女神でもある。
- 2 婚姻儀礼の第1段階シャーディー（sadi）で、花婿がシンドゥールという赤い粉を花嫁の髪分け目に塗るシンドゥール・ダーンという儀礼が行われる。これによって、結婚が成立する。
- 3 ヴァンダナ・シヴァ（Vandana Shiva, 1952-）は、市場原理優先の「開発」が自然を破壊し、女性から生きるための資源をうばっていることを明らかにし、女性と自然への暴力であると主張した。彼女の思想形成の背景には、北西インド山岳地帯におけるチプロ運動があった。伝統的な資源管理において、知識と労働力を提供してきたのは女性であり、こうした女性こそが自然と調和し、自然の多様性を維持しながら、自然をはぐくむことができるとした。シヴァの思想は後にインド版「エコフェミニズム」とよばれるようになる。これに対して、ピナ・アガルワル（Bina Agarwal, 1951-）は、自然に関する知識は性差ではなく、経験的なものであり、「自然を癒す」資質を女性特有のものと認識することは誤りであるとする。自然との結びつきは脱ジェンダー化、普遍化する必要を説く。こ

- の立場は「フェミニスト環境主義 (feminist environmentalism)」とよばれる。
- 4 ガンディを政治家とみてよいだらうか。彼の思想的根幹といえる『ヒンドゥ・スワラージ』(*Hindu Swaraj, "Indian Opinion"* 1909. Reprinted in *Collected Works of Mahatma Gandhi* X, pp.6-68.) では、人間の内面変革が最優先であり、そのために社会改革が必要となり、それが達成されることによって自ずと政治的変革、すなわちイギリスからの独立は実現するだろうという文明論が展開される。ガンディは国民の名の下に、強大な権力が集中するような国民国家の形成は考えてもいなかった。そもそも国家とは組織された暴力である。とまで言い切るガンディに、「政治家としての計算」はないだろう。
- 5 「私は母のお気に入りの子であった。これはまず私が母の子供の中の最年少者であったこと、また、私の心にとって母に仕えることほど尊いものがなかったことによる。」Pyarelal, *Mahatma Gandhi, The Early Phase*, p.201.
- 6 正確には5人であるが、一人は生後まもなく亡くなった。
- 7 Brahmacharyaについては2節で詳述するが、具体的には夫婦の性的関係を断つことを意味する。自叙伝によると克己は解脱であるという理論になる。
- 8 Sushila Nayyar, *Kasturba—Wife of Gandhi*, Pennsylvania, 1948. スシーラは、ガンディの30年間にわたる秘書で、ガンディ第1級証人による不朽の伝記ともいえる記録を残したピアレラル・ナイヤールの妹である。彼女は常にカストゥルバーの側において、カストゥルバーの死後設立されたカストゥルバー基金の理事を務めた。
- 9 エリクソン (E.H.Erikson, 1902-1994) は、ガンディの幼年期、青年期の徹底的な解釈から、ガンディと父母、セクシュアリティなどにおける二面的な構造を分析している。結論的にいうと、ガンディの本質的な部分に問題があるということになる。
- 10 M.T.エグノー『聖なる文字とタミル文化における他の生命概念について』1978年、p.172.
- 11 『スシュルタ本集』大地原誠玄訳、たにぐち書店。
- 12 タミルナドゥ州チェンナイ (マドラス) のアラヴァン寺院はヒジュラの聖なる寺院があり、祭神アラヴァンの結婚を祝うチットラ・ブルニマ祭りが毎年4月1日から14日まで行われる。タミルナドゥではヒジュラたちをアラヴァニと呼ぶ。2008年3月、公文書の性別記入欄に、M、FのほかにはTの欄が設けられた。Tはtranssexualsあるいはtransgendersの略と思われる。‘Third sex gets official status in Tamil Nadu’ *Sunday Times*, March 16, 2008, New Delhi.
- 13 彼 (彼女) たちは5人から15人の共同体を組織して主に北インドの都市に住んでいる。各共同体にはナイク (naik) と呼ばれるリーダーがいて、リーダー会議ジャーマット (jamat年長者会議) で重要事項が決定される。伝統的な仕事は、不明瞭な性的資質を理由に、子供の誕生の祝い、結婚式、寺院の祭りでの儀式をとりおこなうことである。
- 14 婚姻儀礼は三段階に分かれるが、第1段階のシャーディー儀礼後すぐに結婚生活がはじまるわけではなく、花嫁は実家に戻る。数年後、第2段階の婚姻儀礼であるゴウナー (gauna) 儀礼が終わると、花嫁は花婿の家で3日過ごした後、また実家に戻る。最終的に花嫁・花婿がそろって結婚生活を始めるのは、さらに半年から1年すぎた第3段階のドーゲー (doge) あるいはドンガー (donga) 儀礼のあとで、多くの場合、花嫁は17、18歳、花婿は20歳近くになっている。ガンディとカストゥルバーの場合も、13歳から19歳までの7年間のうち、前後あわせて3年も一緒には暮らさなかったという。
- 15 イギリス留学時代、アリソン (エリンソン) 博士の自制によるのではない産児調節の方法について学んだが、内面的手段、つまり自制による産児調節のほうがガンディは価値が高いと考えた。1900年四男Devdasが誕生して以来、性交を慎むことを試みるが、成功したのは1906年の宣言以降である。1925年、最初は避妊目的であったが、結果としてすばらしい道徳的結果になったと述べている。 *Young India*, April 2, 1925.

- 16 「生をうけた子孫は、生殖の呪いをひきずっている。」この連想はガンディの言葉の端々にみられる。ブラフマチャリアの誓いをたてたその年に、ガンディは兄にあてた手紙で「とにかく現在のところ、私は（ハリラールを）息子として考えるのをやめました。」と書いている。父に縁を切ると繰り返し脅かされた息子の気持ちと考えると、子供たちに十分ひどい暴力をふるっているのではなからうか。長男ハリラールはイスラームに改宗し、ヒンドゥーに再改宗し、アルコール中毒でガンディと同年に肝臓病で亡くなっている。
- 17 ガンディは1904年にフェニックス農園、1910年にトルストイ農園という一種の共同体組織（アーシュラム）を建設し、理想の生活を追求した。フェニックスは1000エーカーの敷地で、小さな村落であり『インディアンオピニオン』紙の印刷所もあった。インドに帰国したあとも、1915年にはグジャラート州サーバルマティーにアーシュラムを開き、農業と手工業を中心とする理想的な生活を試みる。その後もアーシュラムを作っていくが、そこはガンディの精神を実践する場にとどまらず、活動や闘争の拠点ともなっていく。
- 18 女性をサティヤーグラヒーとして認めるときの基準として、「あの婦人はもう子供を生む時期を過ぎてからよ」といっている。これは生殖能力のないものが浄であるというパラモンの発想と等しく、「欲」というものに猛烈な反発を示す。そしてその結果、女性を悪の根源とみなしたり、食べ物の摂取を排泄作用と同程度のものとみなしたりする。
- 19 Pyarelal, *Mahatma Gandhi, The Last Phase*, Ahmedabad, 1965, pp.210-219.
- 20 友人の医者が手術をするが、もともと近代医学に批判的であったガンディは、クロロホルムを用いないで執刀するよう求める。痛みは大変なものだったろうが彼女は平然として耐え、その我慢強さに驚嘆するばかりだったという。
- 21 「塩の行進」後、ガンディが拘禁されているとき、カストゥルバーは村から村へ歩き、病院や家々を回り、傷ついた人を見舞い、勇気づけた。Suhila Nayyar, *op.cit.*, p.16.
- 22 「私はもう、盲目的にのぼせ上がった夫ではない。もう妻の師ではない。カストゥルバーは今日もしその気になれば、かつて私が彼女に対してそうであったように、私に対して不機嫌になる（私を叱る）ことができる。われわれは試練を経た友人であり、もはや、一方が他を欲情の対象として見ることはない。今問題にしている出来事は1899年、私がブラフマチャリアについて何も考えていないときに起きた。その頃私は、(妻は) 夫の喜びや悲しみをともにする協力者、仲間というより、夫の欲情の対象であり、夫の命令を実行するために生まれた者と思っていた。」M.K.Gandhi, *An Autobiography, Navajivan*, 1927, p.205.